

I. 紙芝居と戦時文化論の方法 —東北・2022 初夏

大串 潤児

一. 東北へ

「東北には行ってみたいねえ……」。研究会が終つての酒宴のなかでなにげなく呟かれたことが今回の調査を実施する“きっかけ”になりました。たしか、戦時紙芝居、特に幼児向けの作品、童話作品をめぐるいつものがらの楽しい会話、なかでも太宰治『御伽草紙』をどう読むか、という話題のなかであったと思います。『御伽草紙』は空襲下、防空壕のなかで語られる子ども向けの民話、という形式をとっています。そこにどのような戦時下庶民の心情を読み込むか、子ども向け素材を多く扱う紙芝居研究にも無縁の論点ではなかったのです。そして、戦時紙芝居や翼賛文化運動の時代、太宰は『津軽』という名作も生み出していました*1。

もちろんこれまで紙芝居班の研究活動のなかで東北調査の構想がなかったわけではありません。そもそも研究の基礎を築いた労作、新垣夢乃・松本和樹「日本教育紙芝居協会の活動（1938～42年）—雑誌『紙芝居』・『教育紙芝居』本部日誌を中心に」で明らかにされた通り、大都市部を別にすれば、日本教育紙芝居協会活動が活発な地域＝紙芝居運動を受け入れる基盤が存在した地域の一つに、すでに調査を行っていた福岡と並んで秋田があったのです。また、『チョコレートと兵隊』の脚本を書いた国分一太郎は、著名な山形出身の生活綴方運動のリーダーでしたし、川崎大治も訪ねた農繁期託児所のなかには、農村文化運動（共同作業、共同炊事）の実践で知られている秋田県平鹿郡旭村塚堀集落（現在、横手市）もあったのです。これまでの戦時社会史研究でも、東北地方は地方翼賛文化運動がさかんな地域の一つであり、戦時紙芝居についても何らかの手がかりを得られるのではないか、と想定されていた地域でもありました。

私たちがこうした調査の構想を考えている時、一つの報せが東北・秋田から届きました。それは、『秋田魁新報』2021年8月16日付けWEB版や『朝日新聞』2021年8月22日付けWEB版の記事でした。『朝日』は、2021年8月22日、秋田市「土崎みなと歴史伝承館」で行われた戦時中の紙芝居『空白の遺書』上演会の模様を報道しています。記事には「紙芝居は土崎地区にある海禅寺の庫裏から見つかり、寺の檀家でもあった市民会議*2メンバーの伊藤津紀子さん（80）が譲り受けた。伊藤さんは「当初は戸惑ったが、一般の国民も戦争に動員される時代があったことを知ってほしい」と考え

たという」と記されていました。『空白の遺書』はすでに国立国会図書館で所蔵されていることが確認されていました。しかし同WEB版をみると表紙はどうも手書きのようであり、別版の作品ではないかと考えられること、作者といわれる藤田溪山とはどんな人物なのかに関心があつたこと、またなぜ土崎（海禅寺）で発見されたのか、など多くの興味深い論点がそこに見いだせそうでした。私たちの調査地は秋田市土崎（港）町に絞られることになりました。

東北についてはもう一つの情報が届いていました。地方翼賛文化運動が、それぞれの地域の「勤皇（王）烈士」を発掘・調査していることは知られていますが、大政翼賛会秋田県支部はこうした活動に熱心であり、天野源一編『勤王の秋田』第1巻～第3巻、1943年2、6月、1944年2月を刊行しています*3。戦時紙芝居には、南北朝期や幕末維新期の「勤皇（王）烈士」を素材・題材にとりあげた作品がありますが、この秋田という地域では、どのような紙芝居作品が上演（活用）され、また創作されていたのでしょうか。こうした関心から、私（大串）は秋田の翼賛文化運動を調べるとともに、幕末維新时期・戊辰戦争期の秋田県地域史を調べていたのです。

調査のなかで出あった国安寛氏の論文に、秋田県北・比内町（現在、大館市）の出来ごとを地元で創作・発行したと思われる紙芝居があることが指摘されていたのです*4。紙芝居の主人公（題材）は「山城みよ」です。彼女は秋田藩『戊辰役軍功賞典録』全3冊、1871年に秋田郡扇田村「八右エ門 妻みよ」として記載があり、秋田藩ではただ一人女性で『賞典録』に載った人物でした。みよは、夫と死別ののち、村の肝煎・川上新太郎の指導のもとで戊辰戦争に小荷駄方として従軍、そして戦死しています。1869（明治2）年には東京招魂社（のち靖国神社）にまつられたといえます。みよを主人公にした紙芝居『戊辰の烈婦 山城みよ女』（原作・明石貞吉、作画・清水紫峰）は、アジア太平洋戦争期に作られ、1943年から県内および東北を巡回公演していたと述べられていたのです。製作は秋田画劇顕彰会とあり、日本教育紙芝居協会とは別系統の独自の組織とも思われるものでした。

秋田における戊辰戦争では、親幕府＝奥羽越列藩同盟側・南部軍が侵攻してきた県北・大館、二ツ井、米代川筋一帯が主要な激戦地となりました。『比内町史』町史



編さん委員会、1987 年によれば、扇田（村）町（比内町中心部、現在、大館市）一帯は戦火に巻き込まれ、南部軍の放った火により町場は「地上から消え失せる」という惨状になりました。国安氏は「紙芝居だから事実是不明」だとしつつも、南部藩兵が扇田村に侵攻してきた時、地元の学者・中山文厚が「この度の戦争は武士と武士との戦いだ。全く武士同志の意見の相違なのだ。我々町人や百姓には関係の無い戦争なんです」と紙芝居作品のなかで語っていることに注目しています。総力戦のもと、国民あがての戦争協力が求められている時代に、「我々町人や百姓には関係の無い戦争」という表現が成り立っていたことも興味深いことですし、であればこそ「関係の無い戦争」という意識をはらいのけて秋田藩小荷駄方に参加した「烈婦」・山城みよが特筆されたのかもしれない。

思い返せば東北・秋田は角館の「北方文化連盟」に代表される翼賛文化運動の先進地の一つであり、また成田忠久・加藤周四郎らによる「北方（性）教育運動」が著名な生活綴方運動の拠点地域の一つ、さらに農繁期託児所をはじめとする農村文化運動、温泉厚生運動（渋谷定輔らも参加）、医療利用組合、職業指導（戦時集団就職）など、戦時期民衆の生活にかかわる運動や施策が積極的に取り組まれた地域でもありました^{*5}。さらに、土崎（港）町は、第一次世界大戦後のグローバルな文化運動、例えば A. パルピュスの平和論などに影響を受けた小牧近江・金子洋文らによる『種蒔く人』（土崎版）発刊の地でもあって、つまり世界同時代的なモダニズムの潮流、それを受けとめた 1920 年代地方都市モダニズム・地域モダニズムが展開した代表的な地方都市です。こうした戦時社会運動・施策と 20 世紀「地方都市モダニズム」をふまえて紙芝居運動・文化を論じることとはとても興味深い論点になるだろうという「予感」もありました。



図1 『種蒔く人』（土崎版）同人・小牧近江の墓がある善導寺。

戦時地域社会史研究のなかに紙芝居運動・文化実践を位置づけることは研究班当初からの大きな課題でした。日本教育紙芝居協会の地方支部の活動、また地域で独自に創作された作品を調査するという点で、今回の調査は、上の観点を、実証的にさらに深めることになります。これまで雑誌『教育紙芝居』『紙芝居』の記録や、生活綴方運動の記録を通じて日本教育紙芝居協会支部の活動を検討してこなかったわけではないのですが、協会

支部が独自に作成した紙芝居を初めて直接調査すること、ここに今回の東北調査の大きな意義があったのです。こうして秋田土崎を出発点に、県北を縦断し、弘前にぬけるという長軀の調査旅行が企画されたのです。

二. 土崎港・港町のモダニズムと文化の厚み

(1) 土崎港被爆市民会議

私たち研究班一行が秋田空港に降り立ったのは、まだ風を冷たく感じる 5 月 5 日のことでした。車でおよそ 1 時間、秋田市内をぬけ旧土崎港町に着き、土崎港被爆市民会議のメンバーで、この度お世話になる伊藤紀久夫さんのご自宅を訪ねました。

土崎港被爆市民会議は、占領軍にきがねなく土崎空襲の被害者を追悼しようと（紀久夫さんの談話）、1975 年・戦後 30 周年にあたって、それまで別個に慰霊・追悼行事を行っていた土崎仏教会（戦没者慰霊盆踊り）・土崎地区労・浜ナシ山緑町内会・三和興業などの団体が一つにまとまって結成されました（当初は「被爆三十周年記念市民会議」であったがのちに「三十周年記念」が取り除かれた）。中心になったのは港湾労働者の高橋茂さんでした。空襲を記録する運動を全国的に見れば、とくに東京・横浜など大都市部での市民運動としてスタートしていますが、土崎の運動は地方都市におけるその最も早い時期のうちの一つでしょう。市民会議の行う事業としては、慰霊平和祭、盆踊り、空襲資料展・美術展の開催、「平和館」（仮称）建設と空襲被爆史の編さん、などが決められました。以後、慰霊祭・空襲資料展・灯籠流しなどの行事は毎年行われており、あわせて子どもたちに戦争（空襲）経験を語り継ぐ活動や、慰霊碑・戦争遺跡巡見のボランティア・ガイドなどの活動も行われています。2018 年には「秋田市土崎みなと歴史伝承館」がオープンしました。ここには土崎空襲の遺跡でもある「旧日本石油被爆倉庫」も移築されていて、土崎の戦争経験を語り継ぎ、平和文化を創造する拠点の中心となっています。私たちの調査のきっかけとなった新聞報道も、この場所での紙芝居実演―戦争を語り継ぐ営みを報じたものでした。



図2 伊藤さんご夫妻と研究班メンバー（大串撮影）。

まずは、伊藤紀久夫さんのご自宅で、紙芝居を譲りうけた伊藤津紀子さん・紀久夫さんご夫妻をはじめ土崎港被爆市民会議の皆さんと情報交換を行いました。土崎空襲の概要、被爆市民会議の成り立ちと土崎における平和運動の歩み、紙芝居を譲りうけた経緯などをお聞かせいただきました（昼食に手作りの“きりたんぼ”をご相伴にあずかりました）*6。

(2) 『空白の遺書』

日本教育紙芝居協会作品『空白の遺書』は、日本海軍航空隊のパイロット・白相定男少佐とその家族の物語です。白相は南京渡洋爆撃（南京空襲）に参加、南京への進撃作戦で実施された1937年11月18日の蘇州空襲の際、乗機が被弾、そのまま中国軍陣地に墜落・自爆しています。作品内容は、白相個人というよりは、むしろ彼の家族にクローズアップしたもので、タイトルは白相が戦地から送ったハガキの裏面が空白であったことに由来するといえます*7。原作は藤田溪山、私たちのみた作品は藤田の妻が作画したもの、とのことでした。

この作品については、雑誌『教育紙芝居』『紙芝居』にもいくつかの記事があることが確認できました。1939年段階のものは日本教育紙芝居協会「貸出作品目録」に記載があり（「教化紙芝居」という分類）、23場面構成されています。「全編ナラターチュ」の方法＝「未亡人の想い出風に脚色」したものだといわれています（『教育紙芝居』第2巻第5号、1939年5月）。また1942年1月までの「新作批評」（『紙芝居』第5巻第2号、1942年2月）に、藤田溪山・作、羽室邦彦・画、日本教育紙芝居協会発行（22枚、差込み1枚）と紹介されています。内容は「白相少佐の事績脚色」、「夫人を主としての家族描写」とされていますが、「構成に難がある」「構成を過まつてゐるために感銘が緩慢」「説明的になつた」などと評されています（「新作批評」）。設立（1938年）当初の日本教育紙芝居協会作品は、印刷頒布のみではなく自筆・貸与というかたちで紙芝居を地域に供給していました。とすると、これらの記録からは、紙芝居『空白の遺書』には、「貸出作品」版（1939年）と印刷紙芝居＝日本教育紙芝居協会発行版（1942年）の二つの版があるらしいことが想定されます。

『空白の遺書』はどのように実演され、受けとめられていったのでしょうか。日本教育紙芝居協会が行った「紙芝居芸術の確立へ」座談会（1939年4月15日）では、秋田雨雀が「空白の遺書のリアリテ」を「感動深い」と指摘しています。この座談会には白相義男（定男の実兄）も特に観覧のため出席していました（『教育紙芝居』第2巻第5号、1939年5月）。他方、『空白の遺書』は各種団体やイベントにおいても実演されており、例えば東京市牛込区国防婦人会（「本部日誌」『教育紙芝居』第2巻第9号、1939年9月）や、1942年10月

23日には靖国神社祭で実演されたこと（「行事とりどり」『紙芝居』第5巻第10号、1942年10月）が明らかになっています。大阪文化紙芝居研究会（大阪市総動員部に本部がある）は第一回理事会で推薦作品九編を選定しましたが、『芭蕉』『応天門炎上』など芸術的な色彩の作品にまじって『空白の遺書』が選定されています（『紙芝居』第5巻第6号、1942年6月）。こうした記録からは、『空白の遺書』はそれなりの支持を受けて上演を繰り返してきた作品であるともいえましょう。ただしすぐ述べるように、1939年段階（牛込区の国防婦人会）と1942年段階のものの「差異」には注意が必要でしょう。

現在のところ、『空白の遺書』には「異本」ともいべきいくつかの版があることが確認できます。雑誌『教育紙芝居』などに記載のある1939年段階で日本教育紙芝居協会「製作」「貸与作品」として流布し実演されていたもの（A）、1942年「新作」として日本教育紙芝居協会から発行されたもの（B）、です。私たちの研究班が確認したものでは、①国立国会図書館所蔵のもの、②真宗大谷派名古屋別院教化センター（本Newsletter原田論考参照）で収集・撮影したもの、があります。加えて今回、秋田で撮影した「手書き」のもの（③）が確認されました。問題はA・Bと①・②・③の対応関係ということです。Bは藤田溪山作・羽室邦彦画とありますので③とは異なります。Aは日本教育紙芝居協会初期の作品であり、かつ「貸与」とあることから印刷ではなく「手書き」の可能性もあり、③と同一視できるかも知れません。ただ、A（①・②）版をもとに、ある段階で藤田の妻が「模写」（複写）作成したという可能性もあり、いずれにしても今後の確認が必要でしょう。

(3) 藤田溪山のモダニズム

津紀子さんの御案内で歩いて数分の距離にある海禅寺を訪ねました。藤田溪山の四女・萬里子さんが、溪山の人となりについての聴き取りに応じてくださいました。わざわざ横浜にいる次女・海子さんにも電話をつないでくださり、とても貴重なお話をうかがうことができました。

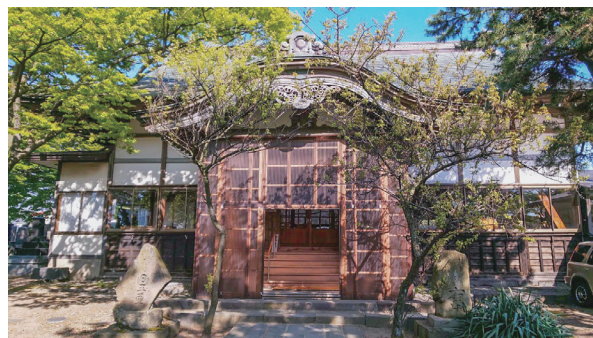


図3 海禅寺（秋田市 土崎）



藤田溪山（1903～1984）は、秋田市土崎町に生まれ、秋田中学校をへて京都・臨済宗大学（花園大学）に進学します。在学中から日活京都（太秦）撮影所に出入しており、俳優として「川島哲」という芸名も持っています。秋田出身であった辻吉郎（1892～1946）監督作品に出ていたようで、クレジットとして判明しているのは「血煙荒神山」（1929年）の峰松役（ちなみに吉良の仁吉は大河内伝次郎）でした。溪山自身は、「学校時代から自由に入出入りしていた当時の日活撮影所には秋田県人もたくさんおった。大曲から出た辻吉郎という監督は、時代劇の方では重きをなしていた。放浪中のある日、私は辻さんと銭湯で会った。君は卒業して秋田へ帰ったはずなのに銭湯で会うとはどうしたわけかとたずねたのがキッカケで、私はついに日活の時代劇の大部屋に研究生として籍をおくことになった」と回想しています（藤田溪山『烏の歌』叢園社、1964年、49～50頁）。

家庭の事情によって溪山は僧籍を継ぐことになり、秋田・海禅寺に戻ってきます。映画俳優の経験もあるくらいですから演劇が好きで、秋田に戻ってからの溪山は、役者活動を行うことや劇団を主宰・組織することはなかったのですが、活発に演劇批評や文化評論活動を行い、また中央から演劇人が秋田に来たときなどは講演会・懇談会の企画を行っていたといえます。溪山は若いころから仲間たちと文学サークルを作り、1935年4月には『草園』という雑誌も創刊しています。あきた文学資料館によると『草園』創刊同人は石田玲水、藤田溪山らで、1954年に『叢園』と改題しています。初期にはブルーノ・タウトや柳田國男らも寄稿し、武者小路実篤や秋田の版画家・勝平得之の作品を表紙絵にするなど、秋田の芸術文化を語るうえで不可欠の雑誌とされています。1935年といえば満洲事変一戦争の危機は「非常時小康」といわれ、それに対応して「文藝復興」が叫ばれていた時代です。太宰治もこの時期から多くの作品を発表することになりますが、地方における「文藝復興」を示すこうした文化状況のなかに溪山はいたことになります。

『空白の遺書』の絵は溪山の妻・照が書いたといえます。横浜からの電話で海子さんは、母は伊予宇和島・伊達藩家老・片倉家の娘であり、明治のころは旧士族の娘として「ハイカラな教育」を受けたそうだと語っています。少女向け雑誌の挿絵、とくに竹久夢二の絵などをよくまねして描いていました、ともいいます。藤田溪山は、紙芝居作成のことをふくめて戦争のこと、戦時下の活動のことを何か家族に語っていましたか、という筆者らの問いかけに、萬里子さんは「父（溪山）は家族そろって食事をする時によく話をしてくれたが、そのなかに「戦争は馬鹿らしい、二度とするものではない」という趣旨の話があった」と思い出を語ってくれました*8。

海禅寺を辞去したのち、伊藤ご夫妻の自宅にもどって紙芝居作品の撮影を行いました。あわせて津紀子さんと一緒に、『思い出のアルバム 土崎一目で見る明治・大

正・昭和』無明舎出版、1981年の掲載写真で藤田溪山が写っているものを確認しました。溪山は、戦時期の社会集団（土崎町翼賛壮年団、土崎翼賛一新会〔政治結社？〕、産業報国会・勤労報国隊など）の集合写真にはかならず写っており、またその場合写真中央にいることも多いのです。溪山が土崎町の戦時翼賛体制の末端を、地域のサブ・リーダーとして担っていたことはこうしたかたちで確認できます*9。

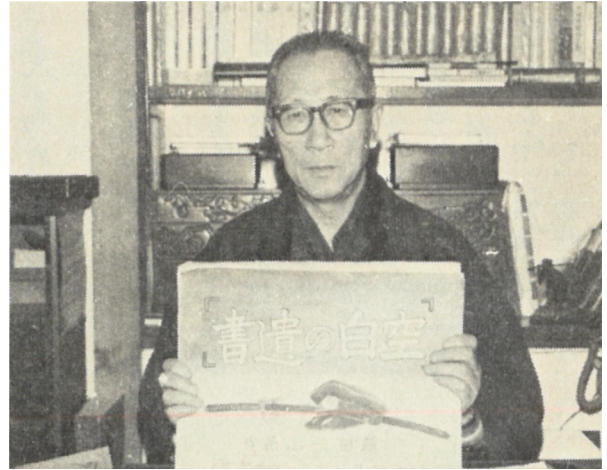


図4 藤田溪山（ふじた けいざん）

多くの文化運動に関わり、戦時戦後を通じて秋田地域文化のリーダーであった。文化批評など溪山の文章は『烏の歌』叢園社、1964年、『烏の歌ふたび』同、1973年で読むことができる。図版は『映画街・演劇街—秋田県興行史』、153頁。

藤田溪山の紙芝居活動はどのようなものだったのでしょいか。幸いいくつかの記録が雑誌『教育紙芝居』『紙芝居』に掲載されています。「実演以来」（『教育紙芝居』第2巻第3号、1939年3月）はその代表的な記事ですが、それによると溪山は「青年団に関係してゐる外、身分は僧侶なので、最初は青年団員と寺に集まる老婆連に実演していたが、次第に寺院での実演にとどまらず町内会員向けの実演へと進んでいる」様子がわかります（記事は1939年9月23日からの実演記録を載せています）。溪山が演じた作品は、日本教育紙芝居協会初期の代表的な作品『銃後の力』や、曹洞宗宗務院が出している作品でした。こうした活動が注目を集めたのか、県庁の国民精神総動員運動実行本部嘱託へ、という声も聞かれたといえます。溪山自身は「町内会やその他で屢々実演する様になり、これこそ私如き者にも出来得唯一の報国運動だといふ確信を持つ様」になったと記しています。秋田市生まれであった日本教育紙芝居協会理事・大島長三郎（劇作家・青江舜二郎）は同世代の友人であり、大島との関係から溪山は1938年に日本教育紙芝居協会会員となっています。1939年9月には、「県内の先生達に呼びかけて」秋田市で紙芝居実演講習会が開かれるまでになり、また秋田市郊外教育聯盟は大島と溪山を招いて「紙芝居の理論と實際をきく事」になつてゐ

る」と記録されています。

秋田市郊外教育聯盟については「加藤周」なる人物が「紙芝居発展への吟味」を書いています（『教育紙芝居』第2巻第5号、1939年5月）。「加藤周」は、郊外教育聯盟とのかかわりからも北方教育運動（生活綴方運動）の担い手であった加藤周四郎であると考えられます。「校外・郊外指導」という活動・発想には松永健哉の教育論の影響を読みとつてもよいでしょう。加藤の記事によれば「われわれの先輩大島長三郎兄が、秋田に滞在したその機に、待ちうけて居たかのやうに、紙芝居教育運動は社会教化の線にのつて来た」、そして秋田市郊外聯盟は総会で紙芝居実演研究を行い、「秋田子供の会」は紙芝居コンクールを実施するなど活動を活発化させました。1939年3月には、溪山の記事にもありますが国民精神総動員実行本部が主催となって紙芝居指導者講習会が開かれ、加藤は「大島兄、藤田兄らの活動ものすごく、今や全県的に見直された紙芝居への教育的関心が、広い社会的な場となつて、ひろまりつゝある……秋田県もまたかくして、全国的な紙芝居実演の一環として、その流れに乗つたといふ感じである」と評したのでした*¹⁰。

藤田溪山が白相少佐（とその家族）の「美談」に注目したのはなぜなのか、また何時頃なのか、そもそもなぜ溪山は紙芝居というメディアに関心を抱くようになったのか、こうした「問い」はすべて宿題として残されています。地方においてモダニズムの文化を浴びていた藤田溪山（映画俳優の経験や演劇への志向）、彼は戦時戦後という時代をどのようにくぐっており、そのモダニズム文化への志向が戦時の「活発な」活動にどのような意味を持ったのか、多くの興味深い問題がそこにはあると思います。なお、藤田溪山は、戦後の秋田市の文化運動のみならず、地域文化全般に大きな役割を果たし続けました。「土崎港被爆市民会議」の初代会長もつとめています。溪山らが創刊した同人誌『叢園』は刊行を続けており、秋田の地域文化に確固とした地位を築いています。

三. 秋田県北の旅—大館・比内

5月6日もさわやかな天気でした。ホテルを出て大館郷土博物館に立ち寄り、すぐに待ち合わせ場所の比内町郷土民俗資料館に向かいました。紙芝居『戊辰の烈婦 山城みよ女』現物は、現在、こちらに収蔵されていました。大館郷土博物館学芸員の加賀至さんが調査にあたって対応してくださいました。紙芝居は扇田小学校所蔵のものでしたが、町史編さんに際して町に寄贈されたものです。扇田町は比内地域の中心地です。以後、郷土民俗資料館の収蔵となり劣化したので複製が作成されました。今回はご厚意もあって、撮影は原本で行うことができました。なお佐藤徳治郎『ふるさとの戊辰戦』よねしろ書房、1977年に、ほぼ全景が掲載されています。



図5 展示してある『戊辰の烈婦 山城みよ女』（許可を得て撮影）。原本は劣化したため複製が常設展示してある。舞台は紙芝居作品とは別の所蔵であったもの。全体を写していないが翼賛選挙について推薦議員を選ぶであろう「扇田町銓衡会事務所」の木看板も貴重なもの。

『戊辰の烈婦 山城みよ女』の作者・明石貞吉については、経歴その他の詳細は不明のままでした。ただし戦前から比内町の郷土誌編さんにかかわった人物であり、郷土誌は草稿まで進んでいましたが、町内有力者とのあいだで見解が対立、未完・未刊行に終わっているといえます（草稿も一部喪われた）。作画をした清水紫峰については未調査・未解明の人物です。また紙芝居刊行の主体となった「秋田画劇顕彰会」についてもほとんど手がかりがありませんでした。

調査を終え、比内町・扇田町内を一巡りしました。町内には、比内地域で第2位の大地主・長岐家の豪華な武家門が移築保存されています。長岐家からは多くの史資料が比内町郷土民俗資料館に寄贈され、現在でも大切に保管・収蔵・展示されています。扇田町会議員の翼賛選挙にかかわる「銓衡会事務所」の木看板などが興味深いものでした。

「山城みよ」関連の史跡は、彼女の銅像が、比内町内の寺院・寿仙寺にありました。もともとは木造でしたが、火災により破損、後に修復されたものといえます。

大館・比内地域の紙芝居をめぐる文化状況については、まだまだ調査すべき多くの課題があります。同時に、ここでは方法論的な問



図6 「烈婦山城みよ女之像」旧扇田町の中心部近くの寺院・寿仙寺にある。



題も指摘しておくことが必要でしょう。それは、戦時における地域の文化状況—とりわけ大衆文化状況のなかで、「勤皇（王）烈士」が描かれることの意味をどのように考えるか、という問題です。具体的な紙芝居作品に即して「勤皇（王）烈士」の表象を分析すること、また地方翼賛文化運動における顕彰（掘り起こし）運動の様相を確認すること、同時代の大衆文化において「勤皇（王）烈士」がどのように作品化され、どのように受けとめられていたのかを検討すること。こうしたことが、方法をとまなう具体的な論点として浮上してくるのです。例えば長谷川伸の「股旅もの」を前提に、地域の「やくざ」すら勤皇の手助けができる（水戸天狗党への協力）ことをテーマとした1943（昭和18）年「伊那の勘太郎」（東宝）の大ヒットをどのように議論に組込むかといった問題です。

比内町を後に、花岡事件の現場を訪ねつつ、一路、弘前に向かいます。岩木山が視野に入ってくると、「津軽に來たんだねえ」と誰ともなくつぶやいたのです。

四. 「鰺ヶ沢」のアジ

弘前では、瀟洒なすがたが津軽の西洋文化やモダニズムを代表しているかのような旧弘前市立図書館と、その近くにある弘前市立郷土文学館を見学しました。市立図書館では、旧制高校をもつ城下町であるこの地域では戦前戦時に多くの文学関係の雑誌が刊行されていたことが印象的ではあったのですが、紙芝居運動についての手がかりをえることはできませんでした。弘前・津軽の文学的風土のうえに、一戸謙三・高木恭三らの方言詩の運動といったユニークな文学運動・文化運動が展開し、さらには地域ファシズム運動としての福士幸次郎の「地域主義」*¹¹ や戦時の弘前の文化運動と地方都市モダニズム文化があったわけですが、こうした問題と紙芝居の連関はこの旅ではうまくつかまえることはできませんでした。



図7 旧弘前市立図書館
1906（明治39）年に建設されたもの。

太宰治の『津軽』小山書店、1944年は、翼賛体制期地方文化への注目という流れとも関連しつつ「新風土記叢書」の一冊として刊行されました。『津軽』執筆のた

め太宰が津軽を旅行したのは1944年5月中旬から6月初めのころであったといえますから、私たちの旅のすぐあとの季節のことです。『津軽』には、初夏の戦時下津軽地域の人びとが描かれているのでしょうか。太宰がそこに見たのは「津軽のつたなさ」「拙劣さ」「不器用さ」であったといえます（「十五年間」『文化展望』1946年4月号）。

この旅で太宰は、五所川原・木造とへて津軽半島を西海岸にぬけ、鰺ヶ沢・深浦を訪ねています。鰺ヶ沢の様子は「山を背負い、片方はすぐ海の、おそろしくひよろ長い町である」、街並みには「コモヒ」（一屋根で覆った歩道）があり、飲食店が多く「昔は、ここは所謂銘酒屋のようなものが、ずいぶん発達したところ」、「今の時代には珍しく「やすんで行きせえ」などと言って道を通る人に呼びかけている」と描かれています。鰺ヶ沢は「町の中心というものが無い」、「これでは町の勢力あらそいなど、ごたごたあるのではなかろうか」ともあり、太宰は翼賛体制期・戦時下にもかかわらず感じられる、地方の町場、その「扇のかなめがこわれて、ばらばらに、ほどけている感じ」をとらえていました。

津軽の旅では、幼少の頃の子守役であって、津軽半島の北端・小泊に住んでいる越野タケを訪ねています。突然の訪問でしたから「たけ」は留守だったのですが、隣家の人から近所の学校裏で行われている運動会に行っているだろう、と告げられ、太宰もそこに行ってみることになります。運動会の様子は次のように表現されています。「私は呆然とした。こんな気持をこそ、夢見るような気持というのであろう。本州の北端の漁村で、昔と少しも変らぬ悲しいほど美しく賑やかな祭礼が、いま目の前で行われているのだ。まず、万国旗。着飾った娘たち。あちこちに白昼の酔っぱらい。そうして運動場の周囲には、百に近い掛小屋がぎっしりと立ちならび、いや、運動場の周囲だけでは場所が足りなくなったと見えて、運動場を見下せる小高い丘の上にまで筵で一つ一つきちんとかこんだ小屋を立て、そうしていまお昼の休憩時間らしく、その百軒の小さな家のお座敷に、それぞれの家族が重箱をひろげ、大人は酒を飲み、子供と女は、ごはんを食べながら、大陽気で語り笑っているのである。日本は、ありがたい国だと、つくづく思った。たしかに、日出ずる国だと思った。国運を賭しての大戦争のさいちゅうでも、本州の北端の寒村で、このように明るい不思議な大宴会が催されている。」「お伽噺の主人公」になったような気がして、太宰は無事に「たけ」と再会を果たすことになります。「本州の北端の寒村」の万国旗が翻る「運動会」、そして「不思議な大宴会」、そこに集う戦時の庶民たちをどのように考えればよいのでしょうか。1920～30年代の地方都市モダニズム、戦争末期—1944年「決戦態勢」期の「運動会」と「大宴会」、この双極にある光源から照らし出される翼賛運動期の紙芝居はどのような姿として映し出されるのでしょうか。こ

こでも戦時紙芝居を見る視点＝方法が鋭く問われている。

だから、ということでしょうか、弘前の街の料理屋では「鰯ヶ沢」のアジの刺身を肴に、東北調査の成果、その実証的課題と方法的課題についての話題に花が咲きました。鰯ヶ沢であがったアジはとても美味であり、それにつられて、思考も深まり、また飛躍して、楽しい一夜になりました。翌日、弘前から五所川原、津軽平野の中央部をぬけ、旅の最後に金木町の太宰の生家（「斜陽館」）を訪ねました。小泊の「たけ」、越野タケの晩年の肖像写真が印象的でした。



図8 太宰治記念館・斜陽館

建物の造作や階段の手すり・天井のデザインなどに津軽屈指の資産家であった津島家の繁栄がしのばれる。

東北調査で収集した「新規発掘」「所蔵判明」作品は次の通りです。

【1】東北（秋田・比内）調査

	タイトル	作者	出版社	出版年	
1	空白の遺書	藤田溪山原作・日本教育紙芝居協会製作	不明	不明 (奥付なし)	新規発掘・手書き
2	戊辰の列婦山城みよ女	明石貞吉原作・清水紫峰画	秋田画劇顕彰会製作	不明	新規発掘・手書き

*1 ちくま文庫版『太宰治全集』第7巻に収録。

*2 後述の「土崎港被爆市民会議」のこと。

*3 翼賛会秋田県支部は天野源一編『秋田の郷土食』翼賛叢書第6巻、1943年10月も刊行している。「郷土」が精神主義的な側面で鼓舞・顕彰されると同時に、戦時食糧不足への対応として一定の「合理性」を持つものと捉えられていることに留意が必要だろう。

*4 国安寛「秋田藩戊辰戦争における百姓の動向について」『秋田県立博物館研究年報』第5号、1980年3月。

*5 北河賢三「戦時下の地方文化運動—北方文化連盟を中心に」赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム—戦時日本における文化の光芒』日本経済評論社、1993年、拙著『銃後の民衆経験』岩波書店、2016年。渋谷定輔の温泉厚生運動でも知られている秋田県日影温泉の紙芝居活用については「温泉も我らの道場」『家の光』

第18巻第11号、1942年11月。また医療組合運動については秋田県厚生農業協同組合連合会編『秋田県医療組合運動史料』同会、1979年を参照。

*6 土崎空襲関連をふくむ秋田の戦争遺跡について最新のものは秋田県戦争遺跡研究会編『秋田県の戦争遺跡一次世代を担うあなたへ』秋田文化出版、2020年がある。土崎空襲については伊藤紀久夫氏が執筆している。

*7 いくつかの伝記的作品があるようだが、ここでは山澤兵部編『白相少佐傳』白相一策〔発行者〕、1939年に依拠した。なお南京空襲（渡洋爆撃）や上海から南京戦における空爆についてはとりあえず笠原十九司『南京事件』岩波新書、1997年。

*8 「戦後76年 絵画の向こうに（上）」『読売新聞』秋田版、2021年8月15日付けも藤田溪山を採り上げている。この記事のなかで海子さんは「紙芝居は近所の人たちとの会合などの場で披露されていた」と母の思い出を語り、萬里子さんは「なぜ父が国策紙芝居に関わったのか、今となってはわからない。きっと国家のために手伝わなければならない雰囲気か当時の日本にはあったのだと思う」と述べ「戦争は悲惨だ。繰り返してはいけない」と子どもたちに言い聞かせていたと述べている。

*9 なお同写真集には土崎の劇場で街頭紙芝居業者が中心となって行われた遺家族慰問演芸会（1941年）の集合写真がある。中心となった人物は「高橋」といい、もと活動弁士で「紙芝居のおちさん」と言われていた。劇場は港座、のちに松竹館・土崎映画劇場となる（なお土崎の事例ではないが能代の「紙芝居のをじさん」の感想録が「断然戦争もの」『紙芝居』第5巻第5号、1942年5月、として記録されている）。演芸会写真では、みな博徒の衣装を着ているようで、おそらく新派剣劇、いわゆる「股旅もの」が上演されていたと思われる。土崎の街頭紙芝居業者については不明だが、加藤周四郎の論説は「街頭紙芝居業者の浄化と協同戦線」を主張するとともに、教育紙芝居の「演出の、技術の、無思想性は、かの街頭紙芝居の芝居が、いった濃厚なやり型より尚性のわるいもの」と批評している（加藤周「紙芝居発展への吟味」『教育紙芝居』第2巻第5号、1939年5月）。

*10 加藤周四郎『わが北方教育の道—ある生活綴方教師の昭和史』無明舎出版、1979年には「秋田市校外指導聯盟」についての記述がある。名称にゆれがあるが「秋田市郊外指導聯盟」「秋田市郊外聯盟」と同一組織であると思われる。本書には残念ながら藤田溪山のこと、紙芝居運動のことについての記述はない。むしろ映画を活用した文化運動に力点があったようである。生活綴方運動教師としての加藤は1940年治安維持法容疑で検挙されるが、加藤らの教育運動と比較して紙芝居運動はより「体制的」であったともいえる。しかし少なくとも日中戦争期には加藤らの運動と紙芝居運動は、国民精神総動員運動を介して深い関係を築きつつあり、その運動実践の内実が問われることになるだろう。少々長いが関連部分を引用しておきたい。「秋田市校外指導聯盟は、まず映画委員会を発足させた。即ち各校1名の校外係から成る委員会は、積極的に市内5つの常設映画館の上映プロを検討し、子供に見せていいものを認定する。認定は試写観覧後の座談会で、学校印の五銭券を発行して自由に見せるか、家族同伴とするか、全校団体見学とするかの観覧方法までを決定する。これにもとづいて、全市の各小学校は映画動員する訳である。「五人の斥候兵」「赤ちゃん」「足柄日記」「綴方教室」「泣虫小僧」「高樹部隊」「小楠公とその母」「路傍の石」「空襲」「忠臣蔵」「北京」「幼きものの旗」「上海陸戦隊」等その他同時上映の漫画・ニュース・コドモグラフなどが取り上げられ、全市の父兄母姉をして子どもから大きな支持を得てつづけられた。（中略）恒例に開かれた「映画座談会」では学校教師の映画委員の他知識文化人や一般父兄母姉の参加もあって、だんだん秋田市の文化活動の中心的存在となっていく」（『わが北方教育の道』、98頁）。加藤によると「それらは、子供らを観念の城としての学校的ワクの中から解放し、現実の社会的生活の場でギリギリの生き方をする児童社会問題として、教師の観念改造の道具として探求する教育運動にほかならないものであった」という（同）。なお加藤周四郎については戸田金一『秋田県教育史 北方教育編』みしま書房、1979年および同『真実の先生—北方教育の魂 加藤周四郎物語』教育史料出版会、1994年も参照。

*11 福土幸次郎の地域主義についてはとりあえず河西英通『近代日本の地域思想』窓社、1996年。